

平成 20 年 8 月 28 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

NPO（市民団体）OSAKA ゆめネット

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

7月28日（なにわの日）は難波宮フェスタ！

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	運営会議3回目、スタッフ会議2回開催、前夜祭、7/28開催
8月	報告書作成、印刷、提出
9月	
10月	
11月	
12月	
1月	

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	第1回目は、テント4つで体験コーナーを行い、来場者数は423人。今年体験コーナーは9つになり、来場者も2日間で1,100名にもなった。参加型としたことで、大人も子どもも楽しく学び、ふれあうことができ、周辺地域や歴史ファンのつながりが深まり、難波宮の知識が深まったことがアンケート調査でも明らかとなった。
今後の展望	毎年の継続することで定着を目指す。また、大阪で活躍する多くの団体に参加を呼びかけ、新しい枠組みの仲間作りと交流に寄与したいと考えている。また、参加型とすることで、大人だけでなく次世代を担う子どもたちを育てることにより、地域社会全体へ大きく貢献していきたい。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 20 年 12 月 19 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

NPO法人 天王寺21協議会

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

絵てがみコンクール「いま天王寺動物園が面白い！楽しい！」

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	7月31日公募締切り（332点の応募あり…過去最高）
8月	8月12日審査会…（200点余をパネル15枚にレイアウト）
9月	移動展・天王寺動物園9/13～19日、あべちか20～26
10月	移動展・上本町ハイハイタウン9/27～28、 天王寺郵便局9/30～10/17
11月	移動展・大阪信用金庫本店10/20～11/7
12月	移動展・セブンイレブン上本町店11/8～30
1月	移動展・住まい情報センター12/10～1/12
2月	

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	天王寺動物園とのコラボレーションは、大変な反響を呼びました。まず締切日に332点の作品が寄せられ、ペットを含めた動物達とのふれあいから楽しさ、癒し、喜び、命の尊さ等、絵てがみを通して、また移動展に来られた人々から、この企画展の継続をの声が多くありました。
今後の展望	良質の作品が寄せられ（上位8点を印刷・配布、関係者先に寄贈）9月から公募に入った「大阪を描こう展」のテーマに反映。この12月上旬に締め切られた作品も、非常によい作品が多く、絵てがみ展（第8回）に向けて、さらに工夫を加えて実施したいと考えています。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

日本学生支援機構大阪日本語教育センター

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

留学生が見た上町台地

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	作品募集用チラシ、ポスターの印刷、各学校などへの発送
8月	各学校へ作品応募のお願い、作品募集開始
9月	作品募集
10月	作品募集
11月	作品募集締め切り
12月	マスコミ各社に取材の依頼、作品の加工など作品展の準備
1月	「留学生が見た上町台地」作品展実施（1/15～18 4日間）
2月	報告書作成

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	留学生の視点からの上町台地も写真やイラストを展示して多くの方々に見ていただくことによって留学生への関心が高まったように思います。大阪城、四天王寺の作品が多かったため留学生が考える上町台地はこの2カ所の印象が強いことがわかりました。そのほかの上町台地の良さも留学生に伝えたいと思うきっかけになりました。
今後の展望	日本人と各国の外国人が直接触れあい、交流を通して上町台地の魅力を発信できるような企画を考え、実施したいと思います。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21 年 3 月 3 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

北大江地区まちづくり実行委員会

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

北大江たそがれコンサート Week

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	・活動の企画と体制づくり
8月	・活動への協力依頼とイベント等実施計画
9月	・イベント等実施準備とPR
10月	・期間イベント（北大江たそがれコンサート Week）の実施（19日～24日）
11月	・活動のまとめ
12月	
1月	
2月	

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで北大江公園のみであった野外ライブの八軒家浜船着場や府庁本館玄関前への展開、地区内の楽器店の協力による演出企画、協力店舗等による自主開催ライブや、期間を盛り上げるイベントなど、都心の魅力をアピールする行事としての定着の下地ができた。
今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度からは、楽器店等の演出企画がスムーズに行なわれ、また、協力や協賛のお願いにも時間を取り、極力自立可能な形で開催できるよう、早期に体制を立ち上げる方針。 ・店舗と出演者、出演者と出演者等の新たな結びつきができ、秋のイベントにかかわらず、ライブイベントの機会が増えつつある。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21年 3月 10日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

あいね・谷町九丁目店（フェアトレード&エコロジー）

共同事業者名（あれば記入してください）

いのちはめぐる実行委員会

2 事業のテーマ・タイトル

いのちはめぐる（持続可能な社会を目指す）

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7月	
8月	
9月	
10月	
11月	
12月	7日 いのちはめぐる秋の収穫祭（上記内容1） 13日映画上映・講演会・ワークショップ（上記内容3）
1月	料理講習、味噌づくり（上記内容2）
2月	

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	環境に配慮した暮らし方が決して経済的に高いものとは限らないことや、自分の手を動かし物を作ることによりゆっくりとした時間を持つ本当の豊かさなど普段の暮らしの中で、誰でも簡単に取り入れることが出来ると感じていただけたと思います。
今後の展望	上町台地は新しい暮らしと、昔からの先人の知恵が活かされた暮らしが混在してある町だと思います、人と人がつながりほっとできる町として、又先人の知恵や工夫を大切に次の世代に日常の暮らしの中で伝えていけるような情報を発信する人達が集まる町になっていくことを目標に“全てのいのちはめぐるりますよう“情報発信を続けていけたらと思います。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21 年 3 月 10 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

からほり倶楽部(空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト)

共同事業者名 (いる場合のみ記入してください)

ロジモク研究会

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)

上町台地コミュニケーション・ルーム(U-CORO)

(特活)レスキューストックヤード

2 事業のテーマ・タイトル

ロジモク減災～路地と長屋のまち「空堀」から減災をめざす第1章

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
6 月	20 日：協働者との企画内容(減災ゲーム)の検討・共有
7 月	4 日『減災ゲーム・クロスロード大会』 9 日：協働者との企画内容(全体)の検討・共有
8 月	18 日：協働者との企画内容(全体)の検討・共有 下旬：U-COROでの展示企画における「上町台地地形模型」の、U-COROプロジェクト・ワーキングとの共同製作
9 月	1 日：勉強会打ち合わせ 9 日～11 日「先進事例調査(東京都墨田区向島地区、台東区・文京区谷根千地区、新宿区神楽坂地区)」の実施 墨田区案内＝小川幸男氏(墨田区区民活動推進部部长) 谷根千案内＝手嶋尚人氏(東京家政大学造形表現学科准教授) 神楽坂案内＝木村晃郁氏(全国路地のまち連絡協議会事務局長)
10 月	6 日：勉強会打ち合わせ
11 月	10 日：勉強会打ち合わせ 14 日『上町地史学講座・歴史と地理から浮き彫りにする地域の弱点』① 「地震の日本史～歴史から見える地震・自信から見える歴史」 講師＝寒川旭氏(産業技術総合研究所関西センター招聘研究員)
12 月	3 日：協働者との企画内容(勉強会・減災キャラバン)の検討・共有 12 日『上町地史学講座・歴史と地理から浮き彫りにする地域の弱点』② 「秀吉の上町台地改造について～大阪府庁地区の発掘調査から～」 講師＝鋤柄俊夫氏(同志社大学文化情報学部文化情報学科准教授)
1 月	8 日：勉強会・減災キャラバン打ち合わせ 9 日：協働者との企画実施に向けた最終協議・段取り等確認 9 日『減災キャラバン on 上町台地』プレー・トーク 31 日『上町地史学講座・歴史と地理から浮き彫りにする地域の弱点』③ 「神戸長田聞き歩きツアー～震災から 14 年のまちへ」 ナビゲーター＝松原永季氏(スタジオ・カタリスト代表)

2月	2日：勉強会・減災キャラバン打ち合わせ 19日『見える分かる地域防災マップの作り方』 「防災マップの基本のキ～流行の地域マップづくりの真の目的は」 講師＝寺本弘伸氏((特活)日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事 9日：協働者との上町台地地形模型の移設検討 1～28日『現在キャラバン on 上町台地』巡回パネル展(「練」、 「萌」など4カ所)及びリレー・トーク(4回)の実施 27日「上町台地地形模型」のU-C o R oから「練」への移設と再展示
----	---

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効果	<p>事業開始前は地域住民も含めた広範な巻き込みやアプローチを考えていました。しかし、土地や建物の所有関係が複雑であり、地域への誇りや愛着も強い空堀界限では、防災・減災についてのアプローチを一つ誤ると、次への歩みが止まりかねない危険性が想像以上に高いことが分かりました。</p> <p>そこで、ロジモク減災第1章では、地域特性を共有し、ともにアプローチ方法を考えていける講師陣やネットワークを獲得することに、より重きを置きました。</p> <p>【効果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 地域住民への減災・防災アプローチ手法の獲得 <p>講師陣による楽しく分かりやすい勉強会は、地域住民へもおだやかに防災・減災について考えるキッカケを示す可能性を見出せました。今回試行した勉強会は、次年度ではより広く告知を行いながら、実施していけるプログラムであることが学べました。</p> ◇ 講師陣との出会いとつながり <p>勉強会での講師陣には、上町断層や東南海地震などと向き合わなければならない空堀界限や上町台地に、強い興味と関心をいただけてもらえました。また、行政の防災関係者や近隣学校の教職員など参加者が講師陣とつながりを得られたほか、主催者であるからほり倶楽部と講師陣に次へつながる信頼関係も得られました。その結果、講師陣からもまち歩きなど「次の一手」の提案もいただいています。</p> ◇ 「減災キャラバン on 上町台地」や「U-C o R o」など上町台地上での他事業との連携実現 <p>「ロジモク減災」を立ち上げたことで名古屋の災害救援NPOとつながり、減災や災害復興に関する全国各地の智恵を集めた冊子「いのちをまもる智恵」の巡回パネル展とリレー・トークを共催することが出来ました。その会場として、からほり倶楽部サイドではお屋敷再生施設「練」と文化複合施設「萌」を提供しましたが、他の会場である「應典院」の應典院寺町倶楽部、「高津宮」の氏子さんたちとよりつながりをつくる機会も得られました。</p> <p>また、上町台地コミュニケーション・ルーム「U-C o R o」での展示企画とタイアップした「減災ゲーム・クロスロード大会」の開催、上町台地地形模型の製作が展開できました。さらに、展示</p>
----	---

	<p>終了後の同地形模型の「練」への移設と再展示が、今回の提案助成を受けたおかげでスムーズに実現することが出来ました。</p> <p>【課題】</p> <p>◇ 近隣学校とのオフィシャルな事業連携</p> <p>今回は、からほり倶楽部が近隣の学校とつながる場「上町台地・学園サミット」を通じて、勉強会などへの教職員の参加も得られました。そこでは、勉強会や地域マップに関する個々の学校との協働についても意見交換を行いました。学校での事業計画は前年度の早い段階で確定するため、年度内での本格的な協働の実現は困難となりました。そのため、「減災マップづくり」は作成前の勉強会として位置づけを変えて実施しました。</p> <p>今後は大阪府教育センターと協働化について検討を深めながら、家庭科クラブなど比較的融通の利きやすい学校部活動との協働をまずはめざしたいと考えます。</p> <p>◇ 勉強会内容など結果・成果の公表</p> <p>今回は提案助成事業に選定いただけただけのため、講師候補の選出や勉強会の試行をかなり展開することが出来ました。そこでの結果も非常に参考となるものでしたが、その内容を概略でも広く伝えていく手立てを考える必要と考えます。</p> <p>現時点ではその取り組みが出来ていませんが、次年度の早い段階でロジモク減災を次へつなげるためにも、勉強会等の結果や成果を伝える努力をしたいと思います。</p>
<p>今後の展望</p>	<p>次年度の取り組み</p> <p>◇ 地域住民への段階的アプローチ</p> <p>上町断層や上町台地の地形特性など微妙なテーマについて、地域住民に無用の刺激を与えないよう留意しつつ、分かりやすく伝えていく段階的アプローチへ歩みを進めたいと考えます。</p> <p>今回の提案助成事業で出会えた講師陣は、全員、空堀の事情を理解して下さり、継続的な協力を確約していただきました。その力を借りつつ、次へのアプローチにチャレンジしたいと思います。</p> <p>◇ 減災マップづくりの試行</p> <p>大阪府教育センターや近隣高等学校の家庭科クラブなどと協働で、今年度実施できなかった「減災マップづくり」を試行したいと考えます。そのステップを経て、平成 22 年度には広範な参画を呼びかけての「減災マップづくり」に進めればと思います。</p> <p>◇ 他地域との連携の強化</p> <p>今秋、神戸市内で開催予定の「全国路地サミット」に減災の立ち位置から参加し、提案助成事業で交流を築いた東京の向島地区や神楽坂地区、神戸長田地区の人々とのつながりをより深めたいと考えます。</p> <p>また、路地と町家、歴史的街並みを抱える京都や奈良とのつながりも築いていきたいと思います。</p>

※ 「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21 年 3 月 10 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

空堀子どもまちづくりの会

共同事業者名（いる場合のみ記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

空堀地区における子どもまちづくりの推進

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
8月	
9月	
10月	広報チラシの作成・広報活動
11月	第1回「まちの宝探し ～まちの宝探し&空堀巨大地図づくり～」
12月	第2回「理想の家をつくってみよう ～長屋模型改造キット～」
1月	第3回「未来のまちをつくろう ～空堀未来地図模型～」
2月	第4回「未来につながる空堀へ ～作品展示会～」

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	子ども達が自分の住んでいるまちの事や古い長屋の事について、実際に手を動かして考えた事で、思いもよらない提案や、子どもの視点でのまちの気になる点などが明らかになりました。活動に際して、地域住民の方から多くの援助と理解を得ることができ、会の従来目的である「地域が動く」という面でも成果がありました。
今後の展望	子どもと保護者の両者を対象にして、地域のことを考えるきっかけとなるような企画を検討していきたいと考えています。また活動の結果を整理まとめて、子どもの視点による地域の要素を抽出し、地域へ還元できるように公表し、今後の活動にも活かしていきたいと考えています。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21 年 3 月 10 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

三帰会
共同事業者名（あれば記入してください）
社団法人シャンティ国際ボランティア会、仏教 NGO ネットワーク

2 事業のテーマ・タイトル

上町台地 防災寺子屋～歴史資源を活用した安全・安心のコミュニティづくり

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
5 月	防災セミナー①「阪神淡路大震災と寺院」 講師：大蓮寺 秋田 光彦氏
6 月	防災セミナー②「上町台地と防災」 講師：大阪ガス エネルギー・文化研究所 弘本 由香里氏
7 月	防災セミナー③「地域とお寺『防災寺子屋』のこころみ」 講師：社団法人シャンティ国際ボランティア会 白鳥 孝太氏・木村 万里子氏
11 月	防災セミナー④「上町台地から『防災』を考える-減災コミュニティと寺町-」 講師：大阪大学コミュニケーション・デザインセンター 菅 磨志保氏 防災てらまちウォーク 「寺院を巡りながら〈防災といのち〉を考える体験型のウォークツアー」 ゲスト：別紙チラシ参照
1 月	防災てらまちトーク ・報告「防災てらまちウォーク報告」 報告者：三帰会事務局 国子 克樹 ・講演「減災のまちづくり」 講師：大阪大学コミュニケーション・デザインセンター 渥美 公秀氏 ・追悼の祈り

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	僧侶自身が災害のイメージをもち、防災の認識をもつ大きなきっかけとなりました。寺院が地域に対する役割を考える契機にもなった。イベント参加の方々にも、防災に対する意識づけのみならず、地域のつながり・世代間のつながりにより、過去の体験を伝承する必要性を認識して頂けた。
今後の展望	今後の展望は以下の通りです。 ①行政・学校など々と協力し、多くの地元区民の方々に防災意識をもって頂けるように、寺院ならではの形で情報を発信していく。 ②より多くの寺院が一体となって取り組めるように僧侶への啓蒙活動。

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21 年 1 月 14 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

NPO 法人 大阪ワッソ文化交流協会

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

四天王寺ワッソアカデミー

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
4月	四天王寺ワッソアカデミー参加者募集
8月	↓
9月	四天王寺ワッソアカデミー開始 ※上町台地のガイドンス
10月	四天王寺ワッソ開催広報開始
11月	四天王寺ワッソ開催（アカデミー参加者出演）

※実施した事業を月ごとに記入してください。

4 事業の効果・今後の展望

効 果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 古代の国際交流を再現し現代の交流に寄与する目的である、四天王寺ワッソの練習過程や参加を通じて、古代の大阪が上町台地を中心に発展し国際交流の原点となり、現在の交流につながっていることをシンプルに分かりやすく伝達できた。 ・ 上町台地に存在する高校生や先生が多く参加し、在日外国人、留学生との国際的な交流が生まれたことで学校以外での人的交流を体験することができた。 ・ 事業に参加した外国人は、自国の歴史を日本で体感することが同時にできた。 ・ なにわの宮跡が歴史的に重要な拠点であったことが、大阪市民にもあまり知られていないことから、上町台地にある歴史遺産としての価値観を高めることができた。
今後の 展 望	<p>上町台地という歴史遺産の存在と価値を四天王寺ワッソという文化によって、証明、伝承されることが期待できる。</p> <p>四天王寺ワッソの中心は、未来を担う青少年であることから、彼らの育成と動議付けが行われる場がこの事業による人的交流であり、毎年継続されれば、将来大きな文化力として、その期待を実現させることができる。</p>

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

平成 21 年 3 月 10 日

上町台地マイルドHOPEゾーン事業 まちづくり提案事業助成 事業報告書

1 申請団体・グループ名

直木三十五記念館

共同事業者名（あれば記入してください）

2 事業のテーマ・タイトル

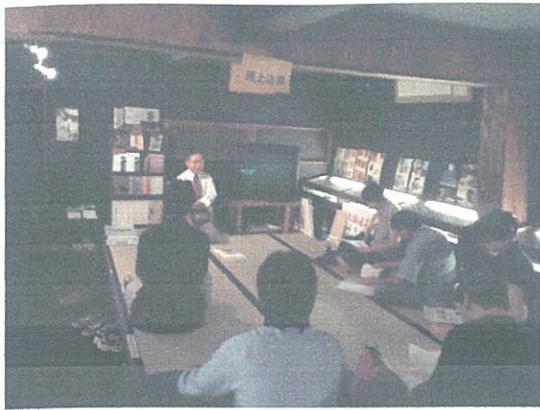
着地型観光へ向けた記念館を核とするボランティアガイドの養成

※応募時につけたテーマ・タイトルを記入してください。

3 事業の時期と実施内容等

時 期	実 施 内 容 等
7 月	ガイド募集 予告
8 月	ガイド募集 要項メール配信「からほり倶楽部だより」「omp 通信」。 Web オフィシャルサイト 上町台地 cotocoto ほか マスコミ「大阪人 10月号」(9/1 発行)ほか
9 月	14 日 ガイド講座(大阪芸術大学短期大学部教授 谷口靖弘) 8 名受講 18 日から ガイドのためのガイドブック（試作版。ファイル形式）作成 21 日 研修ワーキング（日程1） 予備日 23 日 研修ワーキング（日程2） 予備日 日程1, 2は用意したが、受講生の予定が日程3に集中したため、非実施
10 月	5 日 研修ワーキング（日程3） 4 名受講。 ・ 机上学習 からほり倶楽部の活動 地域の活動(HOPE) 地誌 上町台地の文学 について受講。 ・ 実施学習 実施イメージで受講生と話してもらい、特にこだわ りたいポイントなど話してもらう 25 日まで 各自学習 モデル案作成・イメージトレーニング 25 日 実施前打ち合わせ (天候(雨天)や状況(からほりまちアート開催中)を踏まえて調整) (冒頭 平松邦夫 大阪市長来訪) 実施実験(からほりまちアート内) 4 名がガイド実施 (まちあるき参加者 19 名)
11 月	
12 月	15 日 実施後会議（反省会と今後に向けて）
1 月	
2 月	16 日～23 日 ガイドブック編集作業 完成

※実施した事業を月ごとに記入してください。



9/14 ガイド講座 谷口先生 (左) 座学 ガイドの心得 (右) 実演風景



10/25 本番 雨の中、3人でコースを分担してガイドを進めた。

4 事業の効果・今後の展望

効果	<p>今まで案内人によってバラバラであった基本的な案内事項が統合・標準化され、ガイドとしての留意点もわかった。これは我々も勉強になった。それらを学び、修了したガイドを4名つくることができた。これらをもって今後のまちあるき要望にも少し対応しやすくなった。ガイドの1名は地元で生まれ育った地域を愛する若者で、思わぬつながりも得て、記念館への市民参加が進展した。</p>
今後の展望	<p>ガイドのためのガイドブックもでき、今後のガイド養成にも弾みがついた。一方、参加者募集については本年まちあるきを開催される水都大阪 2009 等にも連携を働きかけ、当記念館及び空堀が新名所として定着して行けるよう、継続的なガイドツアー実施につなげたい。</p>

※「3 事業の時期と実施内容等」、「4 事業の効果・今後の展望」は、欄内に記入の上、これらを補足するようなパンフレット・チラシ・写真等があれば適宜添付してください。

「近世四天王寺における寺院社会構造の研究」

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター

山崎 竜洋

要旨

近年、近世都市史研究の発展は著しく、江戸や京都、大坂といった巨大城下町の研究が進められている。これらの巨大城下町を分析するに際して、巨大都市内の部分社会を編成・統合し、構造化する磁極の一つとして藩邸社会や寺院社会などの分節構造の解明が進んでいる。

近世大坂において、このような社会構造を措定すると四天王寺を磁極とする寺院社会を想定されるが、このような視点からの研究はほとんど見られない。そこで、本稿では四天王寺を磁極とする寺院社会構造を明らかにするための足がかりとして、次の点について分析を進めることとしたい。まず1点目は四天王寺、天王寺村之の空間構造を概観することである。2点目として、一山の中心となる衆徒を中心に四天王寺の寺院構造を把握する。3点目として四天王寺に出入する諸役人を通じて四天王寺と周辺地域との関係を把握する。以上の3点について把握することを本報告の目的としている。

はじめに四天王寺の空間構造について検討した。四天王寺が所在した天王寺村は村高7209石の大村であり、その内1177石が朱印地として四天王寺に下されていた。天王寺村内部には町が展開しており、天王寺村は行政的には村であるが内部に町を包摂する「町村」であった。

天王寺村全体の構造として、天王寺村の集落は四天王寺近辺に集中しており、それ以外には南西部の天下茶屋のみであったこと、天王寺村の耕地の大半が畑地で構成されており、田地が少なかったこと、天王寺村南部に溜池が多く展開していたことを指摘した。幕領、寺領の展開状況について、四天王寺西側の地域では幕領と寺領が混在して展開している状況をみた。

四天王寺領は天王寺村内の朱印地・修理料の1490石と今宮村内の鎮守今宮戎社領18石余・同除地1石余という二つのまとまりで構成されており、四天王寺を中核とする寺院社会の空間構造は「寺中・境内」を中心とし、その周囲を伽藍を取り巻く形で展開する「門前」、その外部に展開する「寺領」という同心円構造にあったことを指摘した。

続いて、四天王寺の寺院組織の中核である衆徒について検討した。四天王寺の寺院組織の中核として「衆徒」12院・「秋野坊」が存在し、前者が主として法要を取り仕切ることを職分とし、後者が年貢収納・勘定などを職分としており、彼らが四天王寺一山の運営

の中心的存在であった。近世初頭の衆徒組織は「バラバラ」な状態であったが、慶安5年の条目によって一律20石の配当を受けるようになり、フラットな形で編成されることとなり、近世を通じて一貫して続く衆徒12坊と秋野坊という寺僧組織が確立した。18～19世紀の衆徒は慶安5年の御条目で決められたように12坊で固定されていることが確認できる。しかし、比較的連続して相続される衆徒が存在する一方で、一時期断絶した状況にあった衆徒が存在していたように、その相続のされ方には差が存在しており一律ではなかった。衆徒集団内部は臈次の秩序に基づき集団が構成されているが、法要参勤に際して割り与えられる配当は全くの同額であることから子院間は比較的フラットな関係にあったといえる。また、子院住職と「弟子」などの関係が固定的ではないことから、各子院単位ではなく、衆徒12坊として寺僧集団を存立させていくあり方をとっていたことが指摘できる。

最後に四天王寺の下役人である公人に注目し四天王寺と周辺地域との関係について検討した。四天王寺には衆徒や秋野以外に聖・堂司・楽人などの多数の役人が存在しており、彼らは四天王寺における法要で役儀を勤めたり、四天王寺の伽藍内に存在する堂社や今宮戎社や庚申堂といった伽藍外に所在した堂社での役儀を勤めていた。

その中に含まれる公人は32人で構成され、聖霊会などの会式時の「皇太子仏舎利御輿御幸之節」に出役し、御輿をかくことや、舞楽開催時に楽人へ催促や雨天時には傘をかけるといった単純な作業を主な役儀とし、四天王寺から役料を配当されており、四天王寺からは「重キ寺役人ニ而者無御座候」と認識される存在であった。四天王寺の公人集団はA玉造姓・於勢姓が大部分を占める集団のあり方と、B各々別の「苗字」を名乗る集団のあり方という二つの枠組みで構成されており、近世中期には12,3軒の「家」で構成され、1つの「家」から複数人が公人として出仕するという状況にあった。公人の身分としては寺領百姓であり、公人という寺役人を兼帯している者として四天王寺が把握していた。そして、公人をはじめとする四天王寺の寺役人の内に周辺町の年寄層が包摂されており、彼らは四天王寺から役料の配当をうけていたことから四天王寺と密接な関係にあったと考えられることを指摘した。

都市環境におけるセミ相—上町台地における調査—

大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻

森山 実

要旨

人類による大規模な環境の改変は、さまざまな生物種の個体数や生息域に多大な影響を及ぼし、生物多様性に深刻な被害を与えている。人間の引き起こした環境の改変のうち、生物多様性の損失を引き起こすもっとも顕著なものが都市化である。人間が造りだした都市の環境は、さまざまな要素において自然の環境と異なっており、それまで生息していた多くの種の生存を脅かす。このような生態系の破壊によって、われわれ人間が正常に機能している生態系から得ている種々の恩恵（生態系サービス）が損なわれつつある。そのため、あらゆる学術的領域から、人間活動による環境の改変が生物多様性や生態系機能、さらには生態系サービスに影響する過程を理解することに注目が高まっている。

本研究で注目するセミは日本人にとってなじみ深く、われわれの生活や文化との関わり合いが深い昆虫である。大阪ではかつて、アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata* がもっとも多く生息しており、ニイニイゼミ *Platypleura kaempferi* やツクツクボウシ *Meimuna opalifera*、そしてクマゼミ *Cryptotympana facialis* が共存していた。しかし、戦後の高度経済成長にともなって、西日本の都市部を中心にクマゼミの生息数が増加し、その他のセミの生息数が減少した。都市化によって気温をはじめさまざまな環境要因が変化した。本研究では土壌の硬化に着目して、セミの多様性の減少との関連を調べた。セミの幼虫は孵化後すぐに地面にもぐるが、土壌硬度は幼虫が安全に地中にもぐるための最大の障害であり、セミの生息を左右する要因であると考えられる。都市化による土壌の降下は、多くのセミにとってより生息が困難な環境をつくりだし、セミの多様性の低下をもたらした可能性が考えられる。

2008年9月に上町台地マイルド HOPE ゾーン区域内の7か所の公園、全9調査区画において、抜け殻調査および、土壌硬度の測定をおこなった。全調査区で合計1339個体のセミの抜け殻を採集し、そのうち82.6%はクマゼミの抜け殻で、残り17.4%はアブラゼミのものであった。ニイニイゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミ、ヒグラシの抜け殻はすべての調査区をとおして、まったく見つからなかった。

今回調査をおこなった公園の中でもっとも大きな大阪城公園では、3か所の区画を設けて、

調査をおこなった。ここではクマゼミがもっとも多かったが、アブラゼミも3~15%程度の割合で見られた。土壤硬度は20.0~22.0 mmと、今回の調査区の中では中間的な硬度を示した。大阪城公園の3区画の中でもっとも土壤硬度が高かった区画では、クマゼミの占める割合がもっとも高くなっていた。

城南公園、真田山公園、空清町公園では、アブラゼミはほとんど見られず、98%以上の抜け殻がクマゼミのものであった。これらの公園は、明るく開けており、落ち葉の蓄積はほとんど見られず、土壤硬度値も22 mm以上と高い値を示した。

高津公園では今回調べた調査地の中で唯一、アブラゼミの割合がクマゼミを上回っていた。この公園の植樹部分には、下草も比較的多く、踏み固められた形跡が少なかった。土壤硬度も18.8 mmと比較的低い値を示した。また、生玉公園では1割強の割合でアブラゼミが生息し、土壤硬度は18.4 mmであった。

これらの全9調査区のセミの種組成と土壤硬度の関連性について統計解析したところ、土壤硬度が高くなるほど、クマゼミの割合が上昇するという正の相関があることが示された。室内の実験より、クマゼミの1齢幼虫がアブラゼミやニイニゼミ、ツクツクボウシの幼虫よりも硬い土にもぐることができることが示されている。以上のことから、土壤硬度はセミの種組成を決める一因であり、幼虫のもぐる能力が他の種より高いクマゼミは土壤の硬い土地に優先的に生息していることが示された。

上町台地の調査結果と、大阪府の山間部の自然環境でおこなわれた調査結果を比較すると、セミの多様性、土壤硬度ともに顕著な違いが見られた。自然環境が広がる大阪府の山間部では、アブラゼミやニイニゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミ、ヒグラシの抜け殻が同じ調査区から発見され、多様なセミ相が見られたことに比べ、現在の上町台地のセミの種多様性は非常に乏しい。山間部の調査地では、土壤硬度が14 mm以下の柔らかい土壤をもつ地点が多く、多種のセミが定着できる環境が整っている。しかし、上町台地の土壤硬度は18 mm以上と高く多くのセミには不適な環境であり、これが上町台地のセミ種多様性を制限する要因であると考えられる。

セミの存在がわれわれの生活に与える影響は大きく、とりわけ、夏の風物詩となっているセミの鳴き声は、街の景観を構成する要素であると言えるのではないだろうか。セミの多様性が低下することは、生態学的な観点からだけでなく、文化的な側面からも損失であると言える。公園の植樹部分のありかたについて見直し、柔らかい土壤を維持できる管理方法を検討すれば、多様なセミが生息できる環境基盤をつくりだせることが本研究から示唆された。しかし、土壤の硬化以外の原因が複合的に上町台地のセミの多様性の減少に関与している可能性も考えられ、人間とセミが上町台地をはじめとする都市部において共生する方法を探るためには、さらなる調査研究が進められることを期待する。

上町台地・夕陽丘における坂道景観に関する研究

大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻
環境都市計画研究室 西村智弘、赤塚寛樹

1. 研究背景・問題意識

近年、地域の特性を活かした景観づくりが地域の活性化の一手法として有効となっている。大阪市においても2006年に「大阪市景観計画」を策定し、各地域の特性を活かした景観づくりが求められている。

本研究で対象とする上町台地・夕陽丘は平地の多い大阪市において唯一、起伏を有する地区となっており、天王寺七坂などの多くの坂道が存在する。その中には図絵^(注1)に描かれている坂道もあり、古くから名所として知られている。この坂道を活かすことが、この地区の特性を活かした景観づくりに繋がると考えられる。そのためには、各坂道の勾配等の地形的特性、また壁面形状等の空間的特性によって生じる景観の違いや特徴を把握する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、上町台地・夕陽丘の坂道のり、下りのシーン景観、シークエンス景観^(注2)に着目し、各坂道景観の特徴、またその特徴がどの空間構成^(注3)に起因するかを明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

夕陽丘の坂道を名所として描いている図絵を参考に、上町台地・夕陽丘の中でもこの地区の特徴となる坂道を選定する。また、坂道特有の景観を把握するため、既往の景観評価指標を参考に、本研究で使用する坂道の景観評価指標を設定し、各坂道のシーン景観を把握する。また、設定した指標の中から仰観、俯瞰、また囲まれ感という指標を用いて、各坂道のシークエンス景観を把握する。その後、各坂道景観を比較することにより、各坂道景観の特徴、またそれに起因する坂道の空間構成を明らかにする。

4. 研究対象の坂道の選定



図絵に描かれている坂道、また街路の中心からの坂道景観を望むことができる坂道がこの地区を特徴づける坂道景観であると考え、真言坂、源聖寺坂、口縄坂、愛染坂、清水坂を本研究対象の坂道として選定する(図1)。

図1(左図) 研究対象の坂道

5. 坂道景観の評価指標

坂道の勾配により生じる景観の変化を坂道景観の特徴とし、その特徴を把握するために、勾配なしの場合を比較対象とし、その違いを確認した。(図2)。

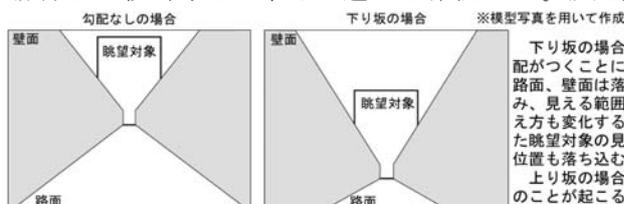


図2 勾配なし、下り坂での路面・壁面・眺望対象の見え方の変化

図2の見え方の変化は坂道景観の特徴であると考え、この特徴を把握するために7つの指標(表1)を設定し、各坂道の景観を把握する。また表2に指標と坂道の空間構成との関係を示す。

表1 坂道景観の評価指標の概要

指標	概要
仰観	眺望対象に対する仰角、また路面の勾配による景観の特徴を把握する。(図3)
俯瞰	俯角8°~10°(中心領域)、10°~30°(ディスプレイ領域)に入り込む要素を把握する。(図4)
非路面占有度	正面方向の視界 ^(注4) の中で路面以外が占める範囲を角度によって表す。(図5)
非壁面占有度	視界の中で壁面以外が占める範囲を各地点の角度によって表す。(図5)
路面の見える位置	路面の各地点が俯角・仰角にしてどの程度の角度で望むかを把握する。
路面見込角	路面の各地点の幅員をどの程度の角度で見込むかを把握する。(図6)
壁面見込角	壁面の各地点の高さをどの程度の角度で見込むかを把握する。(図6)

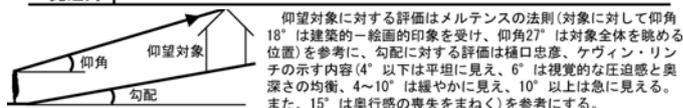


図3 仰観



図4 俯瞰

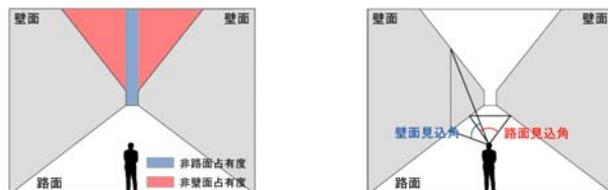


図5 非路面占有度・非壁面占有 図6 路面見込角・壁面見込角
表2 坂道の空間構成の変化による指標の変化(独自の指標のみ記述)

項目の変化	指標の変化	項目の変化	指標の変化
非路面占有度	勾配: 大 → 上り: 小 下り: 大	路面見込角	路面幅員: 大 → 上り: 大 下り: 大
非壁面占有度	勾配: 大 → 上り: 小 下り: 大 壁面高さ: 高 → 上り: 小 下り: 小 路面幅員: 大 → 上り: 大 下り: 大	壁面見込角	壁面高さ: 高 → 上り: 大 下り: 大 路面幅員: 大 → 上り: 小 下り: 小
路面の見える位置	勾配: 大 → 上り: 俯角が大 下り: 仰角が大		

※大: 大きくなる, 小: 小さくなる, 高: 高くなる

6. 各坂道のシーン景観

6.1 分析方法

各坂道の上り、下りのシーン景観を上りは仰観、下りは俯瞰、また上り、下り共に表3で示した残りの5つの指標を用いて分析する。また、各坂道の勾配、路面幅員、壁面高さの測量を行い、平面、断面・壁面図を作成する(図7)。

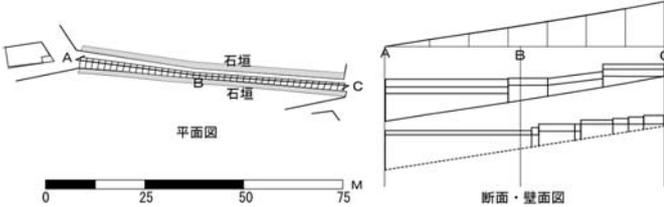


図7 清水坂 平面、断面・壁面図

6.2 各坂道のシーン景観の特徴

各坂道の分析結果を比較し、明らかになった各坂道のシーン景観の特徴を表3に示す。

表3 各坂道のシーン景観の特徴

坂道名	特徴
清水坂	・上りと下りで路面、壁面が視界の中で占める割合に比較的大きな変化があり、上りではそれらに圧倒されるのに対し、下りでは眺望に優れると考えられる。 ・下りのシーン景観で、俯瞰における中心領域に建物が入り込む。
愛染坂	・下りのシーン景観で、眺望に優れていると考えられるが、生い茂る木がそれを阻害している。
口縄坂	・下りのシーン景観で、俯瞰におけるディスプレイ領域に不可視領域を含み、中心領域までの奥行感の喪失を生む。
源聖寺坂	・上りのシーン景観で、仰観における仰望対象の立ち上がりをはっきり確認でき、仰望対象としての認知を高める。
真言坂	・上り、下り共に視界の中での壁面が占める割合が多く、壁面に圧倒されると同時に、壁面への視線が集まると考えられる。

7. 各坂道のシークエンス景観

7.1 分析方法

各地点の壁面による囲まれ感の変化を評価する「囲まれ感」という指標を作成する。上りでは仰観と囲まれ感、下りでは俯瞰と囲まれ感により各坂道の上り、下りのシークエンス景観の分析を行う。

7.2 各坂道のシークエンス景観の特徴

各坂道の分析結果を比較し、明らかになった各坂道のシークエンス景観の特徴を表4に示す。

表4 各坂道のシークエンス景観の特徴

坂道名	特徴
清水坂	・囲まれ感が上り、下り共に徐々に変化する。 ・下りにおいて、常に中心領域に建物が入り込む。
愛染坂	・仰望・眺望対象の変化がそれぞれ2箇所ある。 ・一部の区間において、囲まれ感が徐々に変化する。
口縄坂	・上りにおいて、路面による奥行感の喪失により景観が変化する。 ・下りにおいて、ディスプレイ領域に不可視領域の有無で景観が変化する。
源聖寺坂	・仰望・眺望対象の変化がそれぞれ3箇所ある。
真言坂	・上り、下り共に終始、囲まれ感を感じる。

8. 各坂道の坂道景観に起因する空間構成の把握

各坂道の空間構成の分類を行う。地形的特性は断面が一定勾配、変動型の2種類、平面が直線、折れ曲がりの2種類、空間的特性では壁面形状が一定高さ、切り通し型、変動型の3種類、仰望・眺望対象の有無、中心領域に入り込む要素により分類を行う。(表8)。

表8 各坂道の空間構成と坂道景観に起因する項目

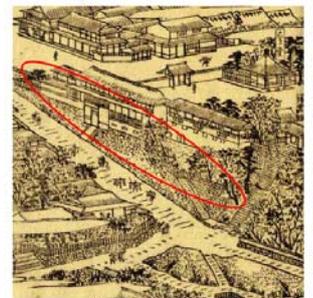
	清水坂	愛染坂	口縄坂	源聖寺坂	真言坂
地形的特性	終始一定の勾配 (5~10)	変動型 (2⇒6⇒9)	変動型 (1⇒6⇒15)	変動型 A・B型 (3⇒9⇒14⇒5)	終始一定の勾配 (5~9)
平面	直線	折れ曲がり(1箇所)	直線	折れ曲がり(2箇所)	直線
平面形状	切り通し型	一定の高さ切り通し型	変動型	変動型	一定の高さ
空間的特性	仰望対象 白の建物 眺望対象 黒の建物	仰望対象 茶色建物⇒なし 眺望対象 なし⇒黒の建物	仰望対象 木 眺望対象 なし	仰望対象 家⇒石垣⇒なし 眺望対象 町並み①⇒②⇒①	仰望対象 鳥居 眺望対象 なし
中心領域	黒建物	壁面・路面⇒路面	路面 ディスプレイ領域 に不可視領域含む	路面⇒町並み① ⇒町並み②⇒路面	路面

○坂道景観に起因していると考えられる項目

9. 結論・考察

シーン景観、シークエンス景観に着目することにより、上町台地・夕陽丘における各坂道景観の特徴とそれに起因する空間構成を明らかにすることができた。清水坂、口縄坂は地形的特性に起因する坂道景観であり、勾配の変化等により特徴づけられる景観であるため、坂道でしか体験できない景観であるといえる。愛染坂、源聖寺坂、真言坂は空間的特性に起因する坂道景観であり、仰望・眺望対象や壁面等の人工建築物の見え方が特徴的な坂道景観である。また、現在と過去の坂道景観を比較すると、清水坂では図絵からわかるように、空間構成において、地形的特性はほとんど変化がなく、また空間的特性である壁面形状も共に切り通し型の壁面であり、変化がないことが確認できる(図9)。そのため、囲まれ感が徐々に変化するという現在の清水坂の坂道景観の特徴は、過去の坂道景観の特徴でもあったと考えられる。

上町台地・夕陽丘の坂道景観はそれぞれ特徴が異なり、またその特徴に起因している空間構成も異なる。また坂道の中には、過去と現在の坂道景観の特徴が一致すると考えられる坂道も存在する。今後は各坂道景観の特徴を考慮した景観づくりが必要であり、それがこの地区の特性を活かしたまちづくりにつながると考えられる。



過去の清水坂
『摂津名所図会』より(一部)



現在の清水坂

○は切り通し型の壁面

図9 過去と現在の清水坂の壁面形状

【補注】

(注1) 摂津名所図会、浪花百景、初代長谷川貞信『浪花百景』、滑稽浪花名所のことを示す。

(注2) 視点が変わることによるシーンの移り変わりを断続的に体験していく景観

(注3) 地形的・空間的特性のことで、地形的特性は断面と平面、空間的特性は壁面形状、眺望・仰望対象の有無、中心領域の要素のことで示す。

(注4) 視点から上下に30°ずつ、頂角60°の円錐を視界とする。

【参考文献】

・種口忠彦(1975)『景観の構造-ランドスケープとしての日本の空間-』

上町台地の文化遺産をとりまく景観とその変遷

～関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター所蔵「牧村史陽氏旧蔵写真」に見る史跡・名所・寺社～

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

内田 吉哉

研究報告書要旨

上町台地は古代から近現代にいたるまで史蹟・名所・寺社が数多く存在する。こうした文化遺産は、これまでも大阪市・大阪府によって整備されてきたが、文化遺産をとりまく環境は時代につれて変容しつづけている。本研究は、上町台地の史蹟・名所・寺社をとりまく環境や景観も、文化遺産のひとつであるにとらえ、その変遷を調査し、上町台地における文化資源活用の可能性を探ることを目的としたものである。

本研究では、調査のための資料として関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが所蔵する「牧村史陽氏旧蔵写真」を利用する。これは、昭和 53 年に大阪文化賞を受賞した郷土史家、牧村史陽氏が撮影した写真資料である。

「牧村史陽氏旧蔵写真」は、昭和 53 年に大阪文化賞を受賞した郷土史家、牧村史陽氏が撮影した写真資料である。昭和 20 年代から 40 年代にかけて、大阪府下の史蹟・名所・寺社等を撮影したもので、その数は大阪市中心部と天王寺区に関するものだけでも 1639 枚にのぼる。「牧村史陽氏旧蔵写真」は、平成元年（1989）に中央区が誕生する以前の撮影であるため、旧行政区の東区と南区にわけて保管されている。旧行政区別に数えると、その内訳は東区が 625 枚、南区が 492 枚、天王寺区が 522 枚になる。中央区の全域が上町台地マイルド HOPE ゾーンの範囲に相当するわけではないが、この時期の大阪の写真がこれほどの規模でまともに残されている例はまれである。

写真には、当時の街並みや、史蹟が新たに整備された様子、あるいは、かつての名所が寂れつつある様子などが記録され、昭和中期の上町台地の状況を知ることができる。本報告書では、そのうち特徴が明確に確認できる 43 点の写真を取り上げ、現在の環境・景観との比較検討を行なった。

本研究からは、文化遺産をとりまく景観・環境の変化について 3 つの問題点が導き出された。

1 つには、現在、史蹟そのものの保全や整備は大阪市・大阪府の行政によって良好に守られているということである。上町台地で史蹟がある場所を訪れると、そこには必ず何らかの目印となる案内板が置かれている。また大阪市建設局による「歴史の散歩道」整備によって、近隣の史蹟をめぐるコースが設置されている。このため市民にとって史蹟を身近に感じることができ、その概要を容易に理解することが可能となっている。

2つめとして、「環境」という点においては名所を名所たらしめている要素が大きく失われつつあることが判明した。建築物の高層化による景観の変化や、都市開発による地下水の枯渇などがあり、文化遺産が本来持っていた歴史的意義が薄れつつある事例が多く見られた。

3つめに、従来から存在した文化遺産に対して、近年新たに価値が見いだされた事例が存在するということがあげられる。その中には八軒家の整備のように行政が主体となって進めるものがあり、また大江神社の狛虎のように市民有志の手によって盛り立てられてきたものもある。

本研究を通じて、文化遺産の保護を環境・景観を含めた範囲にまで拡大するには、地域住民の生活の便利さとのバランスを取る必要があると感じた。そのため、今後、文化遺産を地域活性化のための資源として活用していくためには、文化遺産に対する地域住民のコンセンサスが求められることになるであろうとの予測をのべた。